23歳女子高生（補完）

シバ（MW）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
２３歳女子高生（補完）

【Ｎコード】
Ｎ３４２７Ｕ

【作者名】
シバ（ＭＷ）

【あらすじ】
２３歳女子高生の本編では明かされなかった裏話。

補完する予定のもの

本編ですくいきれなかった話を短編と言う形で追加補完していきます。
自分で自覚のあるものは【自主回収】として、指摘して頂いた物は【詳細希望（ご依頼）】として随時気の向くままに更新をしていきます。

【自主回収】
・靖親の一目惚れ
・真尋の一目惚れ
・真下の一目惚れ？
・珠美の一目惚れ
・芦野の一目惚れ
・チカのライバル『リュウ』
・例の飲み代
・たいちゅんの優しさの秘密
・韓国出張の時に
・ユキのキス
・若かりし頃のやんちゃな龍太郎
・花田達との和解
・元カノの真相

【詳細希望（ご依頼）】
・じ、実の兄……？
・怪我したのバレバレ
・停学の真相

真尋の独白

聞いてほしい。
私が今横にいる裸族の赤毛男を見つけたのは公園だった。
初めて見た瞬間、綺麗な男だと思った。
それが恋かどうか、今なら分かる。
きっと、私はあの瞬間、囚われていたのだ。

「……私が一目惚れするなんて」

私は一目惚れなんてものを信じてなかった。
相手のことを知らないのに、好きになるわけがないと思ってたから。
だって、それは外面を好きになったってことでしょう？
だから、それはなんか違うと思ってた。

相手は不良だし、イケメンだし、なんか怖いし、自分とは住む世界が違うし、合わないと思ってた。
でも実際話すようになって、なんか違うと思った。
一緒に過ごすうちに『なんか違う』が増えていった。
臆病な私が、『もっと知りたい』と思うようになっていった。

それと、恋愛対象は年上だった。
年上は何も言わなくても察してくれるから、一緒にいて凄く楽だった。
でもまあ、何故か龍は対象外だけどね。
年下なんて我が儘で自分勝手で……つまり、自分と同じだから反発して合わないと思ってた。
なのに、この男は私より遥かに大人で、私より遥かにガキだった。

一番ビックリしたのは父親への態度だ。母親への態度もびっくりしたけど、それ以上に酷かった。
と言うのも、反抗的と言う意味ではない。恐ろしく従順という意味でだ。
まるで機械のように淡々と返し、両親は揃って複雑そうな顔をしていた。
ここに、この男の恐ろしいまでの観察眼が養われた秘密があると感じて、何も言えなくなった。
事がでかすぎて聞いて良いことか分からない。
でも、この先もしこの男が許してくれるなら、少しずつほじくり返そうと思う。
彼が私にそうしたように。

そう言えばたいちゅん。
彼の面倒見の良さは異常だ。
この男に会ってなかったら惚れてたかもしれない。
……いや、ないか。たいちゅんだもんね。

あ、そうそう。
高校生活を始めて、一番戸惑ったのは私の大切な友人達のことだ。
みんながどうして私に優しくしてくれるか分からなかった。
でも、付き合っていくうちに『ああ、この裏表のない愛情が、本来の人間なんだ』と思った。
変な方向に大人になったのを悔いた瞬間だ。

……まあ、話がそれたけども、結局私は外面でこの男を好きになったのかと、結構本気で悩んだ。
と言うのも自分がそれを軽蔑してたからで。
あれだ。『外面かよ』と。『その人のこと何も知らない癖に』『どうせ、中身を知って残念だったら離れるんだろう』と。

だから戸惑った。自分がそうなるとは思わなかったから。
これが、いつまでもウジウジしていた理由の１つでもある。
言わないけどね。本人には。

「何考えてんだよ」
「別に」

隣に寝っ転がる裸族を見てニヤリと笑う。
今なら胸を張って言える。例えこの男の顔が事故でグチャグチャになったとしても、私は決して嫌いになったりしないだろうと。
……だから、あれは一目惚れじゃないってね……！！
往生際が悪い用だけど、じゃなきゃなんか恥ずかしいじゃない……！

「言えよ」
「何も無いよ」
「言え」
「何も無いって」
「早く言え。じゃねぇと……」
「……え？　ちょ、ちょっと……ちょっと！！」

聞いてほしい。
今、少し悩んでいる。
この男が何を考えてるか分からない。
先は長いしこれから知っていけばいいことだし、結構幸せな悩みだと思う。
つまり、私は今、幸せである。

靖親の独白

聞いてほしい。
俺が横でニヤニヤしている小さな女を見つけたのは公園だった。
初めて見た瞬間、世界にエフェクトがかかった。
それが恋かどうか、今なら分かる。
きっと、俺はあの瞬間、囚われていたのだ。

今までそれらしい女は沢山いた。
節操がねぇなと思うけど、いたもんはしょうがねぇ。
こいつも広い心で許してくれているようだし。そう言うところが年上の女って感じがする。

初めて会った時、あいつはビビって警戒していた。
入学式には出るなって言われてたけど、どうしても見に行きたくてたいちゅんと一緒に忍び込んだ。
追いかけっこをして必死に逃げてるあいつを見て、何故か『俺は一生こいつを追いかける羽目になるんだろうな』と思った。
あながち外れてなかった訳だけど。

そう言えば、あいつと出会って2回停学をくらった。だいぶ落ちついたと思ってた矢先で、担任も親も酷くがっかりしていた気がする。
恥ずかしくて理由なんてはっきり言ってないけど。
1回目は確か修学旅行でだ。
あの時、何故かヒーの写真を持ってる男がいた。
男は入学式で目を付けたと言っていて、下品でとてもあいつには聞かせられないようなことを言っていた。
酷く不愉快な気持ちになって、衝動を止められないまま殴りかか

った気がする。
まあ、その後は推して知るべしだ。
2回目は、M字ハゲ。あいつ、ヒーの悪口を言いやがった。
貧乳だとかションベン垂れのガキだとか。
あたってるだけに悔しかった。お前が言うなと。言っていいのは俺だけだと。
だから殴った。
あいつは喧嘩が嫌いだ。不良も。
だから喧嘩は止めてたのに、あれはあのM字ハゲが悪い。

嫌いと言えばあいつは人間も嫌いだ。
ビックリするぐらい面倒な女で、こんなやつ、いくら可愛くてもモテねぇだろうなと思った。
だから安心してたんだ。
俺だけがお前を好きなんだぞって。
なのにあいつは意外とモテて、陰でコソコソ動きまわる男を見るたびに『どうせこいつの本性を知ったら逃げるんだから、大人しく引け。ここは俺に任せろ』と思った。
じゃないと、俺みたいな不良じゃない、普通の男とくっついちまう気がしたから。
横から出てきたどこぞの男に盗られたくなくて焦っていた。
そのせいで、いらん誤解も生んだけどな。
全てはあいつが可愛いのがいけないんだ。しかも自覚ねぇし。
でも、俺から女誘ったことねぇからどうしたらいいかわかんねぇし。
たいちゅんまでもが真尋を狙ってる気がして、気が気じゃなかった。

そう言えばそのたいちゅん。
俺のことを重い男だって言ってたな。

まあ、俺が束縛系だと知って一番ビックリしてるのは俺だから、心配すんな。
それでも良いってあいつが言ってんだ。問題ねぇさ。

ああ、そう言えばあいつの家族。
めちゃくちゃ怖かった。
たいちゅんの母も相当怖かったけど、それ以上だ。
あんな怒鳴る父を見たことが無かったから、マジでビビった。
しかもそれ以上に怖いのはあいつの妹だ。
双子と言うだけあってそっくりで、そのそっくりな顔で悪態を付くのだ。
2人して「どこの馬の骨ともわからない」だとか「泥棒猫」だとか言って俺を罵った。逆に母親が「まぁまぁ」なんて言うくらいにだ。妹はあいつのことが好きすぎる。父親が2人いるようで、今からちょっと憂鬱だ。
まあ、確かに髪は赤いしピアスはいっぱいついてるし、パンツ丸見えだからな。
ある程度覚悟はしていたけど、足りなかった。全然足りなかった。
まあ、ゆっくり攻略していくか。先は長ぇし。

「ねぇ！　聞いてないでしょ！？」
「聞いてる」
「嘘ばっかり！　絶対聞いてないね！」
「俺がお前の言ってること聞き逃すわけねぇだろ」

聞いてほしい。
今、少し悩んでいる。
横で般若のような顔をしている女が何を考えてるかすぐ分かる。
分からないフリをするのは結構大変だ。でも、拗ねる顔が見たくて分からないふりをする。結構幸せな悩みだと思う。

つまり、俺は今、幸せだ。

龍太郎の独白

聞いてほしい。
俺があの真尋と初めて出会ったのは生みの親の家だった。
初めて見た瞬間、天使か妖精だと思った。

俺は生まれてすぐ、子供が生まれないと悩んでいた夫婦のところに養子に出された。
別に生みの親を恨んではいない。生みの親と育ての親は夫婦同士全員が幼なじみらしい。
そんな俺に、生みの親が「貴方の妹よ」なんて紹介したのが真尋だ。俺が4歳の頃だった。良く考えたら養子に出しといてそれもスゲェ話だなとは思うけど……まあ、養子には出したけど息子は息子と諦めきれなかったのかもしれない。
じゃあ出すなよとも思うけど、そこはあの2組の夫婦で色々とあったんだと思う。

話がそれたが、真尋を見た瞬間、こんな愛くるしい生き物がこの世にいたのかと衝撃が走った。
テンションが上がりすぎて吐くほど興奮した覚えがある。
最初は毎日会いに行っていたけど、育ての親が複雑そうな顔をするからいつの間にか行かなくなった。

たぶん、道をそれ始めたのはそれくらいからだったと思う。
17歳の俺は完璧にやんちゃになっていた。
ピアスに刺青。喫煙、飲酒、暴走、喧嘩。
思い付く限り全ての悪をやっていて、両親をだいぶ困らせた覚えがある。刺青なんかは今でも残っていて、見るたびに馬鹿なことやったなと苦い思いがこみ上げる。真尋には絶対見せらんねぇな。嫌

われちまう。

そんな俺を元の道に正したのは、１７歳になった真尋だった。

たった一言『私、不良って嫌いなの』と言った。冷たい目で。

何度も色んな奴に言われたその台詞。

俺が完璧にやんちゃになっていた頃と同じ年になった真尋が言うと、何故かずっしりとくる重みがあった。

誰に言われてもどこ吹く風だったのに、内臓が生きながらに切られるほどの精神的ダメージを受け、思わず「今まで何も言わなかったくせに、しゃしゃってくんな」と凄い剣幕で怒鳴った気がする……正直あんま覚えてねぇ。

ただ、傷ついた真尋の顔だけはしっかり覚えている。後悔しすぎて死ぬかと思ったほどだ。

衝撃すぎて眠れなかったのを覚えている。当時、俺が２１歳くらいだったはずだ。いや、２０か？

まあ、それから俺は真尋の為に馬鹿みたいに真面目になった。単純だと思うだろ？

そして、真尋のご機嫌をとる為に犬なんか買ってやったりして。

「リュウって名前つけた」なんて嬉しそうに言うからこっちまで嬉しくなったものの、「犬と遊ぶから」と全然構ってくれなくなったのに嫉妬した。

俺の世界の中心は真尋だ。あいつがゲーム好きで内向的なのは幸いだった。それでもしぶとく寄ってくる男を排除しつつ、これでは真尋が結婚できないなと思っていたが……まあ、そんな結婚なんて先の話は想像もしたくなかった。

起業したいってのを知っていたから、それを俺がサポートする為に馬鹿な脳みそフル回転で色々勉強したな……。

思い返していて気付いたが、俺はあいつのことが相当好きらしい。それも重症レベルで。

そんな可愛くてしかたねぇ真尋が、何も相談しない時が一度だけあった。
いや、別に今までもそんなことあったけど、そういうレベルじゃないのが。
どうやっても隠し切れてねぇ包帯姿。刃物で付けられたと思しき切り傷は痛々しいぐらい腫れていた。
大げさなんてもんじゃなくて本当にヤバイんだと一瞬で分かって、あいつが縮みあがるくらい問い詰めた。
あいつは『服で隠してたのに何でバレたの！？』なんて顔をしてたけど、俺が何年お前を見て来たと思ってんだ。
大体お前は俺の妹にも……ああ、そう言えば、血の繋がってない妹がいる。
俺があまりに真尋に構うから、嫉妬しているらしい。
まだ俺達の血がつながってないことは言ってないけど、誰も言うつもりがないからそのままでいいと思う。
でも、真尋にきつく当たるのは許せねェ。贔屓するつもりはない。これは区別だ。
大嫌いな大人の台詞。だけど、この件に関しては同意する。

「あのー……さあ」
「どうした」
「その……前、言ってた……やっぱりいい」
「実の兄の件か？」
「……」

そう言えば雰囲気にのまれてうっかり言っちまったな。
言わなきゃ良かったと後悔する半面、『兄』としての特権で今まで以上に接近できるようになった。
『兄』なら近すぎても誰も何も言わねぇだろ？　ま、他の奴は俺らが兄弟だなんて知らないけどな。

「本当だけど、カナエはまだ知らない。詳しく知りたいか？」
「……いい」
「そうか」
「……好きって、何……？」
「なんだ？　お前、今日やけに聞いてくるな」
「ごめん……」
「謝るな」
「……」
「お前は、どっちだと思う？」
「何が？」
「『友情的な愛』なのか『男女的な愛』なのか」
「……わかんない」
「……」
「……ゆう、じょう？」
「……だな」

聞いてほしい。
今、少し悩んでいる。
相手の女が何を考えてるか分かりやす過ぎる。
正直コイツに関しては負い目しかねぇ。大事にしないといけないと思う反面、兄として厳しくしないといけないとも思う。
つまり、俺は今、なるべくこの均衡を壊したくないと思っている。

泰造の独白

聞いてほしい。
俺があの訳のわからん男と初めて出会ったのは小学校の頃だった。
初めて見た瞬間、無愛想な奴だと思った。

俺が必死に話しかけても「ああ」とか「おう」としか返さない。
俺の連れも家族も騒がしいのしかいなかったから、世の中にはこんなに無愛想な人間がいたのかと動揺した。
まさか会ったばかりでこんな無愛想な態度を取られるとは……とへこんで必死に話しかけた気がする。
でもそうすればそうするほど空回りしてる気がして、案の定「吉良、うるせぇ」と言われた。
それからだ。この俺が恋する乙女のように何とかコイツの気を引こうと躍起になったのは。
何でもないのに後を付いて回ったり、一緒にさぼったり、一緒に昼飯食ったり。
ただ、コイツは押しても引いても何の反応も返さないつまらん男だって言うのに、何故か男女関係なくモテた。
それがまたムカついてなあ……。

高校1年の終わり頃、あいつは族のリーダーになった。
でも、どこかどうでもいいって雰囲気が漂っていて、俺が必死になってお膳立てしたのとか、今まで必死にサポートしてきたのとか、とにかく小学校からのモヤモヤが爆発して、あいつのもとを黙って去った。
それから数日の間、俺はずっと違うやつとつるんで……まあ、それなりに楽しく……っつーか……いや、全然楽しくなかったんだけどよ。

チカの野郎が怒り狂った顔で俺の前に現れたのは、それからさらに数日経った後だった。

「お前、なに勝手にいなくなってんだよ」

開口一番そう言って殴られた。

いや、違う。殴ったのが先だ。

あいつはポカンとしてる俺に静かにそう言った。

「勝手にいなくなるんじゃねぇよ。迷子かお前は。今世紀最大の迷子か。子供騙しの巨大迷路に入ったら捜索機動隊が動くくらいの迷子なのか。首輪付けとかなきゃならねぇくらい迷子なのかお前は。あぁ？」

訳のわからん暴言を浴びせかけるチカを呆然と見つめながら、何故か「俺は迷子だったのか」と思った。

情けなく座りこんで一言「悪ぃ」とか呟いた気がする。

そして急に悟った。

こいつは言葉が足りなすぎると。

俺がこいつの感情を取り戻す手伝いをしねぇといけないと。

俺が世話好きになったのは、下に兄弟が多いからだと思ってた。

でも、コイツと出会って思う訳だ。兄弟も確かに1つの理由ではあるけど、最も大きな理由はこの大きな子供のせいじゃないのかと。

だから俺はこのどうしようもない子供をなんとか立派に育たねばと思ったわけだ。見てらんねぇし。

……でも、そんなの必要ないってくらいあっさり良い所を持っていった女がいる。

最初こそ酷く嫉妬したけど、似た者同士なんだと気付いてからは憐みを感じた。

それと同時に、おもりをする子供が増えたってことに気付いちま

った。
俺ってホントいい奴……。

聞いてほしい。
今、少し悩んでいる。
連れが何を考えてるかさっぱり分からん。
今までわかってたことも、真尋と付き合うようになってからガラッと変わっちまった。女1人でこんな変わる物か？　本当の恋ってことなのか？　体験したことねぇから良くわかんねぇけど……。
つまり、俺は今、なるべく早く彼女が欲しいと思っている。別に寂しい訳じゃねぇ。

珠美の独白

聞いてほしい。
私があの年上ぶった男と初めて出会ったのは中学の頃だった。
初めて見た瞬間、嫌な奴だと思った。

「こいつが俺の娘な。珠美、こいつが芦野。これからここで世話するから」
「……ふーん」
「初めまして。お嬢さん」
「……どうも」

無愛想だった私も悪い。
でも、あいつはパパがいなくなった瞬間「無愛想な女だなあ」って言いやがった。
ニヤニヤしてたけど、私は居心地が悪くてため息を吐いた。
そうしたら、追い打ちをかけるように「みんなアンタのことを特別扱いしてたな。俺もした方がいいのか？」と言ってきた。
本当に『特別扱い』されてたものだから、かっとなって「馬鹿じゃないの？」と言うと部屋を出た。

特別扱いは嫌いだった。
でも、本当は調子に乗ってたのかもしれない。
だから、図星をさされて怒ったわけだし。
ただ、次の日からあいつが下手糞な敬語で『特別扱い』を始めた時、嫌悪感でいっぱいになった。

あいつのことをはっきり意識しだしたのは……と言っても今思えば一目惚れだったからアレなんだけど。

とにかくはっきり自覚したのは中学校3年になった頃だった。
当時、反抗期まっ盛りだった私は、今となっては何故そんなことで……と思うほどくだらない理由でパパと喧嘩して家を飛び出した。
冬の雨の降る中、薄着で飛び出した私。
帰るわけにもいかなくて、公園で一夜を明かそうとしてブランコに揺られながら雨にあたっていると、公園の入り口から女が入ってきた。
女は傘もささずにこちらを見ていて、速足で近寄って来て、気持ち悪いと思った瞬間、女の手に握られた包丁に気付く。　本能が危ないと叫び、私は必死に逃げた。逃げて逃げて辿り着いた先は丘の上広場と呼んでいた場所。
女は、いつの間にかいなくなっていた。

恐怖と寒さでガクガク震えていて、また襲われては困ると木の上で一夜を明かした。
明け方、目を覚ますと木の下で男達がニヤニヤしながら私を見ていた。もう後は三文芝居のような展開。木を蹴られて「下りて来い」の罵声が飛ぶ。よくよく聞いていればあの男の知り合いだそうで、それに気付いた瞬間怒りで我を忘れて木から飛び降りていた。
怒りに任せて何人かを丘の上から突き飛ばした気がする……下は……まあ、結構な崖なんだけどね。ほら、この世界の人は頑丈だから……！
死んでないから大丈夫。それよりも、あの男のせいで自分が変なことに巻き込まれたって怒りの方が強かったわけ。
でも、普通に考えても男相手に勝てるわけも無く……あっさり捕まって洋服ビリビリ。
ここで恰好よく芦野が助けにきて……なんて思うでしょう？
全然。全然だから。あいつ、寝てたしね。家で。
助けてくれたのは末ちゃんだった。末ちゃんって言うのはあの男を引っ張ってきた人で、だいぶ前からうちにいる。2人は友であり

ライバルであり兄弟のような関係らしい。
家についてタオルにくるまれて震える私を見たあの男は、一瞬だけ顔をしかめると末ちゃんを見て出ていった。

あの男のせいでこんな目にあったのに……って1人こっそり泣いた。
部屋にパパが来たけど鍵をかけて無視して、私は着替えもせず、風呂も入らずベッドの上で体育座り。
どれくらい時間が経ったか。突然扉が壊されて、血塗れのあいつが入ってきた。

「……は？」
「遅くなって、すんません」

そう言って渡されたのは、私を襲った男達が付けていたアクセサリーや時計。
どれもひび割れたりして壊れて、血が付いていた。
慌ててタオルで血を拭うと、痛そうに顔をしかめる。
タオルが真っ赤になった頃、ようやく血の出どころが鎖骨の下あたりだと気付いた。
もうその後は酷かった……ゴキブリ見つけたって出ないような声で叫んで、家中の人総動員。
何故か芦野は「違うんです！　違うんです！！」と真っ赤になりながら叫び、そのまま車でお抱えの病院に運ばれた。
後で聞いた話、どうやら1人で単独仕返しに言ったとか……。正直、嬉しかった。組みとしてではなく、個人として動いてくれたあの男の行動が、凄く嬉しかった。

聞いてほしい。
今、少し悩んでいる。

連れが周りに遠慮しているのか、あまりベタベタしてくれない。
まあ、男の人なんてこんなものかもしれないけど。パパもいるしね。ていうか、そういうキャラでもないし。でもなんかねぇ……。
つまり、私は今、手っ取り早く既成事実をつくっちゃおうかなーなんて考えている……なーんてね。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3427u/

23歳女子高生（補完）

2011年11月13日01時40分発行